

# 日本経営倫理学会会報

JAPAN SOCIETY FOR BUSINESS ETHICS STUDY

## 2016年9月度研究交流例会開催報告

会長 梅津 光弘（慶應義塾大学商学部・准教授）

2016年9月17日（土曜日）の研究交流例会は加藤尚武先生（京都大学名誉教授、前鳥取環境大学学長）をお招きして、慶應義塾大学三田キャンパス北館ホールにおいて特別講演会を開催した。

加藤先生については紹介するまでもない、日本における応用倫理学の草分けであり、『環境倫理学のすすめ』（丸善、1991）や『応用倫理学入門』（晃洋書房、2001）をはじめ多数のご著書を出筆されている日本倫理学会の第一人者である。

以前よりは是非一度、日本経営倫理学会でお招きしたいと考えていたが、京都大学名誉教授として、また鳥取環境大学学長として大変お忙しい先生にお声をおかけできずに今日までできてしまった。実は私が帰国した1992年の12月に当時奉職しておられた千葉大学の倫理学研究会に私をお招きいただき、企業倫理学の発表をさせていただいたのが加藤先生とのおつきあいの始まりであった。また、翌年には『応用倫理学研究 I』になにか出稿するように言われ、最初はパターンリズムについての論文を提出したのだが、編集の飯田亘先生よりこのトピックではなくビジネス倫理学の論文を書いてほしいと強く要請されて、再提出したのが「アメリカにおけるビジネス倫理学：その背景、課題、基本文献」という論文であった。締切りまでに論文を提出したのに、書き直しを命じられたのは後にも先にもこの件が唯一の経験だったが、この論文を契機にして水谷雅一先生や中村瑞穂先生、宮坂純一先生など多くの先生方と出会いが生まれた。背後にあって私を後押ししてくださった加藤先生には今でも感謝している次第である。

今回のご講演では「倫理の社会的効用」と題して、昨今の企業不祥事の事例から始まり、カント、ミル、フランス・フクヤマ、G. E. M. アンスコムにまで至る規範倫理学の諸理論を引用された理論的にも実務的にもスコープが広く、理論的にも深い考察をお話いただいた。2時間近くに及んだその内容を逐一報告することはできないが、倫理の果たす社会的効用として「信頼感の醸成」があり、これは一朝一夕には作れないが、「信頼は次の世代に渡すバトン」であるというお言葉が印象に残っている。

## クリストフ・リュトゲ先生特別講演会開催報告

会長 梅津 光弘（慶應義塾大学商学部・准教授）

2016年10月15日（土）慶應義塾大学においてクリストフ・リュトゲ（Christoph Lütge）ミュンヘン工科大学教授の講演会を開催した。先生はミュンヘン工科大学ピーター・レッシュャー・ビジネス倫理講座教授という肩書きをお持ちの方で、ビジネス倫理学、実験倫理学、政治哲学等、幅広い分野に渡って活躍されている哲学者である。今回は東京大学の招きで来日され、『ドイツにおける経営倫理学の歴史』という題で貴重なご講演を伺うことができた。

ドイツにはカント、フュヒテ、シェリング、ヘーゲル、マルクスなど豊かな社会哲学の伝統があり、また倫理学の分野においても日本哲学界にはこれまで大きな影響を及ぼしてきた。ところが近年のビジネス倫理学や応用倫理学の発展の中では、アングロサクソン系の研究が主に紹介され、ドイツやヨーロッパにおける展開についてはほとんど紹介されてこなかった。

今回の講演会では、そうした間隙を埋めるべく、ドイツビジネス倫理学の歴史的背景と近年の展開について詳しいご講演をいただくことができた。

ご講演では、ドイツにおける哲学・倫理学の伝統の中では経済と倫理を異質なものとして捉える二元論と経済と倫理の同一性をとなえる一元論の大きな流れがあり、それらが統合されることなく現在にまで及んでいる歴史が簡潔に語られ、現代においてもハーバマスやホーマンといった哲学者の研究や論争に受け継がれていることが述べられた。

リュトゲ先生はホーマンの弟子であり、一元論の流れを支持している。「秩序倫理(Order Ethics)」と名付けられた考え方によれば、社会の秩序付けの根拠として倫理の果たす役割があり、そうした社会基盤の上に経済活動やビジネス活動も秩序づけられるという点に収束する。より詳しいお話は時間の関係で伺えなかったが、一元論の考え方は渋沢栄一などの思想にも表れており、日本においてもようやく定着しつつあるのではないかと思われた。

## 第6回 CSR 構想インターゼミナールの開催報告

理事 高田 一樹（南山大学大学院ビジネス研究科・准教授）

10月7-8日に国立オリンピック記念青少年総合センター（渋谷区代々木）で、第6回 CSR 構想インターゼミナールを開催した。昨年度に引き続き日本経営倫理学会より経済支援を受けることが叶い、会員各位にはこの場を借りて感謝申しあげる。

4月初旬より開催概要の公表し、7月末に募集を締め切った。申請時にはゼミの紹介、研究テーマと発表概要など詳述を求め、事務局の審査を経て次の7ゼミが参加した（発表順）。

- ・東北学院大学経営学部矢口義教ゼミ「観てけらいん——石巻の民宿を活かした地域活性化」
- ・淑徳大学経営学部葉山彩蘭ゼミ「東北3県プロジェクト——観光客の招致と地域復興の提案」
- ・跡見学園女子大学マネジメント学部宮崎正浩ゼミ「ファストファッションを変えるため——オーガニックコットンを普及させる新たなビジネスモデル」
- ・東北大学経済学部高浦康有ゼミ「震災の際の外国人への対応——多国籍対応避難所の必要性について」
- ・慶應義塾大学商学部梅津光弘ゼミ「熊本復興プロジェクト」
- ・関西大学社会安全学部高野一彦ゼミ「巨大災害を乗り越えるBCP——東日本大震災・熊本地震における企業の実態調査からの提言」
- ・獨協大学経済学部高安健一ゼミ「ミャンマーの栄養改善プロジェクト——スプルリナで母子の命を救え」

7日夕方より前夜祭を開いて学生同士で親睦を深め、8日午前から発表大会を開始した。教員12名、学生87名ほか参観者を含め、約100名が会場に集った。15分間の発表後には教員や学生から矢継ぎ早に質問の手が挙げられた。今回から新たにポスター・セッションを企画し、研究関心と考察をまとめた1枚の模造紙を前に、学生が質疑応答に臨む機会を設けた。

審査結果は270点満点中、上位4ゼミが11点差にひしめく展開となった。最優秀賞を高安ゼミ、優秀賞を高浦ゼミが受賞したが、得点差はわずか1点だった。高安ゼミは初出場にして、学生大賞、ポスター・セッション賞も獲得し、3冠に輝いた。参加者の献身もあり、盛会のうちに幕を下ろしたことをここに報告する。



## CSR 研究部会活動報告-二宮尊徳に学ぶ CSR 現地研修

平塚直（経営倫理実践研究センター）

いつまでも企業の不祥事が絶えない。「経済なき道徳は戯言、道徳なき経済は罪悪」二宮尊徳が言ったとされるこの言葉こそ、今の課題を解決するカギだ。

日本経営倫理学会 CSR 研究部会と経営倫理実践研究センターCSR 部会の有志 39 名は、10 月 19 日(水) CSR 現地研修として小田原にある二宮尊徳の生家、記念館および報徳博物館を見学した。

今回の CSR 現地研修は、2014 年の「三方よしに学ぶ」（滋賀県彦根市訪問）、2015 年「渋沢栄一に学ぶ」（埼玉県深谷市訪問）に続く第三弾にあたる。これまでの 2 回とも歴代の学会 CSR 研究部会長の指導のもと、現地研修の翌年に有志が成果として、「三方よしに学ぶ 人に好かれる会社」（2015 年 5 月サンライズ出版）、および「渋沢栄一に学ぶ 論語と算盤の経営」（2016 年 4 月同友館）としてそれぞれ出版してきた。

今回の現地研修は二宮尊徳を題材に取り上げたものである。二宮尊徳というと、誰もが小学校の校庭で、薪(まき)を背負いながら本を読んで勉強する少年の像を思い浮かべる。しかしながら、この尊徳がいつ頃、どのような分野で、どのように活躍したのかについては、意外に知られていない。

尊徳は、1787 年に小田原市郊外の裕福な農家に生まれた。5 歳の時、大災害で一家の田畑を失う。14 歳で父を、16 歳で母を失い、伯父に引き取られた。伯父の家では、アブラナの種を蒔いて油を採取したり、捨てられた稲苗から 1 俵のコメを収穫したり、自らの努力をコツコツと積み重ねることで必ず成果が得られるという「積小為大」の教訓を得る。そして、必死の努力の末、20 歳で自分の家を再興した。

その後、尊徳は、小田原藩の家老・服部家でさまざまな倹約を提案して財政再建に貢献する。ここでの貢献が認められると、小田原藩に仕えることになる。小田原藩においては多くの餓死者を出した天保の飢饉に対し、粟栽培や堤防建設の指導などを行い藩の苦境を見事に乗り切っていく。これらの成果が伝わりさらに、烏山藩、下館藩、相馬藩など他の藩からの要請も受けるなど、農業経営の分野で数多くの成果を上げていった。

この尊徳の指導する復興事業は、人間の欲を認めながらも、周りたくみに思いを調和させ、心もお金も同時に豊かに育むという「報徳」思想に支えられている。「報徳」思想は、農村救済の枠を越えて幅広い分野に浸透し、渋沢栄一、安田善次郎、豊田佐吉、松下幸之助、土光敏夫をはじめとする、多くの経済人たちにも多大な影響を与え、今も脈々と息づいていると思われる。

二宮尊徳の「報徳」思想から現代の経営の在り方を学び、企業の持続可能な発展に如何に生かすかが、今回の CSR 現地研修の参加者、ならびに関係者の課題となるのではないかと。



## ISBEE 第 6 回世界大会参加報告

会長 梅津 光弘（慶應義塾大学商学部・准教授）

2016年7月13日～16日の日程でISBEEの第6回世界大会が上海の社会科学学院で開催された。Ethics、Innovation、and Well-Being in Business and the Economyをテーマに、4つの統一セッション、18のパネル、30以上の論文発表といったこれまでにない包括的な大会となった。出席者も大会委員長のJoanne Ciullaを始め、中国上海社会科学学院院長の王哉、中国倫理学会会長の万俊人、Richard De George、Lynn Sharp Paine、Thomas Donaldson、Patricia Werhane、Daniel Sarewitz、Georg Kellといった錚々たる学者や実務家が発表者として出席され、さながらビジネス倫理学のオールスター・ゲームといった様相であった。

本大会の意義やプレゼンテーションの質の高さは、言を待たないものであったが、中国の上海でこの大会が実施されたことが特筆に値するものであると考える。筆者は第一回世界大会が日本の麗澤大学で実施された時のことを思いださざるをえなかった。ISBEEの世界大会が世界各地で3年ごとに行われてきたことで主催地のビジネス倫理研究が活性化し、実務的にも大きな進展がみられてきたことを思うと、これが中国におけるビジネス倫理学の歴史的な転換点になるような気さえしている。

多くのことが発表され、検討され、討議がなされたが、一つだけ印象的だったセッションの一部を記すと、Thomas Donaldsonが司会をし、ハーバード・ビジネス・スクールのLynn S. Paine、OECDのMartine Durand（ビデオ出演）、国連PRIのNathan Fabianらのセッションが印象的であった。特にPaineは近年日本でも議論が活発化しているコーポレート・ガバナンスの問題を取り上げ、その理論的基礎となってきたagency theoryがいかに現代社会においては不適當であるかを示し、急激に変化する国際的市場経済のもとでは、より進化した企業観のもとで様々な制度を再構築していくべきであることを説いていた。

本学会からは、麗澤大学の高巖、中野千秋、梅田徹の諸先生、大阪経済大学の杉本俊介先生及び数名の大学院生が参加発表された。私は日本における経営倫理学の状況をJABESの現状をふまえて報告させていただいた。

## ESG 投資研究部会発足と部会員募集の案内

監事 小方信幸（帝京平成大学現代ライフ学部・教授）

ESG投資研究部会は、本年9月17日の第151回理事会で設立の承認をいただき、現在、第1回例会を来年1月に開催すべく準備を進めております。

ESG投資とは、投資の意思決定において、環境（Environment、E）、社会（Social、S）、ガバナンス（Governance、G）のESG要因を考慮する投資です。当部会では、ESG投資とESG要因を考慮するSRI（社会的責任投資あるいはサステナブル投資）は同じものと幅広く捉えて研究活動を行います。

ESG要因は、2006年に国連が責任投資原則（PRI）を提唱した際に導入した概念です。100年以上の歴史がある欧米SRI市場は、PRIを契機に急速に拡大し、現在も発展を続けています。一方、わが国では、2015年半ばまで、機関投資家の多くはSRIまたはESG投資に関心を示しませんでした。ところが、2015年9月に、世界最大の年金基金である年金積立金管理運用独立行政法人（GPIF）がPRIへの署名を表明すると、わが国でもESG投資への関心は劇的に高まりました。

しかし、わが国におけるSRI・ESG投資は、欧米と比較すると歴史が浅く規模は小さいうえに、ESG投資に関する実証研究は極めて少ない状況にあります。そこで、当部会では、統計的手法を用いたESG投資のパフォーマンス分析、ESG要因と財務要因の経路を分析する事例研究など、ESG投資に関する実証研究を積極的に行い、わが国の当研究領域における知見の蓄積に貢献したいと考えております。また、当学会の目的に照らし、ESG投資の倫理性についても実証研究の対象といたします。

当部会には、学会入会希望者を含め、既に10名数名が参加の予定です。しかし、継続的な研究活動を実現するため、当部会の研究目的に賛同いただける学会員の皆様の参加を募ります。当部会では、部会員にESG投資に関する実証研究の成果を発表する機会を提供し、学術的成果を上げることを目指します。奮ってご参加ください。

## 第25回研究発表大会のお知らせと発表者公募の件

2017年度の研究発表大会は6月中旬の土日に慶應義塾大学三田キャンパス（東京・港区）にて開催予定です。本大会では第25回記念大会として「経営倫理の過去・現在・未来」を統一テーマに通常の大会とは異なる特別なポスター・セッションも企画検討中です。発表会場の関係で詳細は次号（来年2月発行予定）に掲載予定です。従来通りの発表を希望される方は別途配布いたします募集要項に従ってご応募ください。

### 【募集要項概要】

1. 応募資格：日本経営倫理学会会員。
2. 応募締切：2017年3月4日（金曜日）（4日消印有効）  
\* 要旨および予稿の電子データと出力原稿4部を提出してください。
3. 応募先：日本経営倫理学会 第25回研究発表大会実行委員会
4. ポスター・セッション  
模造紙一枚程度に、発表要旨をまとめていただいたポスターを展示します。院生をはじめ企業のCSR活動などの紹介も考慮します。

## 第151回理事会（2016年9月17日）議事録（要旨）

### 【決議事項】

- (1) 新入退会者承認の件  
新入会員8名（正会員6名、学生会員2名）、および退会者1名（正会員）承認。会員数は452名に。
- (2) 新規研究部会立ち上げの件  
小方監事より新たに「ESG投資研究部会」の設置提案があり、一同承認。
- (3) 平成29年度研究発表大会統一テーマ決定の件  
平成29年6月10日（土）・11日（日）、もしくは17日（土）・18日（日）の日程で、慶應義塾大学にて開催予定。統一テーマ案「経営倫理の過去・現在・未来」等については、今後準備会を設置して引き続き検討する。

### 【報告事項】

- (1) 平成28年度研究発表大会（東北大学）総括の件  
事務局より大会収支報告。
- (2) SBE、ISBEE参加および日中交流報告の件  
梅津会長より7月に上海交通大学にて第6回ISBEE、8月に米国カリフォルニア州アナハイムにて米国経営倫理学会の年次報告会が開催されたとの紹介。

### 【懇談事項】

- (1) 第9回経営倫理シンポジウムの件  
テーマ、講演者などの提案を募集。平成29年3月に来日予定の米国ミネソタ大学のパク教授の講演を含めた企画を検討。
- (2) 関連団体に関する情報共有  
環境経営学会において「企業不祥事を乗り越えて～持続可能な社会実現に向けた提言～」が公開されたとの紹介があった。

### 【確認事項】

- (1) 次回研究交流会の開催について（候補日程等）  
梅津会長より、今後の研究交流会については、10月15日（土）にドイツ・ミュンヘン工科大学のクリストフ・リュトゲ教授、11月26日（土）に野田聖子議員（男女共同参画をテーマ）、平成29年1月28日（土）に成城大学の十川教授による報告を予定。
- (2) その他  
事務局より、理事会議事録案は次回開催前に電子メールで送付して適宜修正したうえで確定したいとの提案がなされ、一同承認。

## 平成28年度年会費納入のお願い

先般の年次総会で決議された通り、学会諸活動を推進する財源としての年会費につき納入をお願いいたします。

◇年会費：正会員・1万円　学生・3千円　法人(上場)・5万円　法人(非上場)・3万円

◇年会費支払い有無の確認は事務局(以下)まで、お問合わせください。

◇年会費自動振替のお手続きがお済みでない各位は切換をお願いいたします。

### 【学会連絡先:東京事務局】

住所:〒102-0083

東京都千代田区麹町 4-5-4 桜井ビル 3階

電話/FAX:03-3221-1477 / 03-3221-1478

E-mail:info@jabes1993.org

担当:蟻生常任理事(会報)

河口常任理事(総務)

発行:日本経営倫理学会

### 編集後記

今回、2度目の編集のお手伝いをさせていただきました。前回ご案内し本年6月に開催されました発表大会(於、東北大学)では多くの会員の皆様にお集まりいただき、熱意あふれるご報告、活発なご討議によって大いに盛り上がりましたこと、この場をかりて厚くお礼申し上げます。そして、早いものでまた来年の大会のお知らせを今号でさせていただきますことになりました。

さて年が明ければ、米国では新大統領への政権交代が行われるとのこと。強気の発言で物議を醸してきた実業家のトランプ氏が大統領になることに不安感を抱く人たちも多いようですが、大国をリードする役目を負う以上、ビジネス・パーソンとして磨かれた知性(intelligence)と誠実性(integrity)を十分に発揮されることを期待しています。

(編集担当/理事 高浦康有)